

M29a **2007年における京大飛騨天文台ーひので共同観測の成果報告**

柴田一成、一本潔、北井礼三郎、上野悟、永田伸一、石井貴子、森田諭、萩野正興、小森裕之、西田圭佑、松本琢磨、西塚直人、中村太平、滝澤寛、大辻賢一、渡邊皓子、川手朋子、阿南徹、橋本祐樹（京大理附属天文台）、磯部洋明（京大宇宙総合学研ユニット）、R.A. Shine, T. Tarbell（ロッキード）、神尾精（国立天文台）

2007年5月28日～6月3日、2007年8月6日～19日の2度に渡り、京大飛騨天文台（地上太陽観測）とひので衛星の間で共同観測を行なった（HOP0012: K. Shibata et al.）。目的は、（1）浮上磁場領域のダイナミックスの解明、特に、アーチフィラメントの上昇速度の測定、フィラメント下降流の直下の衝撃波の検出、光球浮上磁場の足元における磁気要素の進化、（2）低温ジェットの世界分布と発生機構の解明、（3）エラーマンボムの起源、などの光球・彩層の微細活動現象の解明である。主な観測手段は、飛騨天文台ドームレス太陽望遠鏡の垂直分光器を用いたカルシウム K 線、H 線のスペクトロヘリオグラム観測、H α リオフィルター観測、ひので可視光磁場望遠鏡（SOT）のカルシウム H 線ブロードバンドフィルター観測、光球の分光偏光磁場観測、極紫外線（EIS）分光観測、などである。ひのでの高空間分解能連続観測と、飛騨天文台における高精度分光観測を組み合わせることにより、ひのでのカルシウム H 線ブロードバンド像で捉えられた彩層ダイナミック現象の正体が、カルシウム線プロファイル解析や、線中心成分 (k3, h3)、輝線成分 (k2, h2)、wing absorption component(k1, h1) 各々における合成単色像などにより、ついに明らかになりつつある。

本講演は、飛騨ひので共同観測のシリーズ講演のイントロとして、共同観測全体の概要を紹介する。